

2022年5月14日配布

第303回山口西田読書会（2022年5月7日開催分）プロトコル

村上優子記

1. テキスト：「場所」の「三」第4段落247頁1行目から248頁13行目

「述語的なるものが映す鏡であり、見る眼である。」(248.13)

先日、カーネーションをもらった。最近のカーネーションの赤は何とも言えない深い感じの赤である。早速それを言葉にしようと試みるのだが、やはり言い尽くすことができない。赤は赤である。赤は赤に於てある。一つ目の赤は（質量を含む形相）であり、二つ目の赤は（意識せられた赤：純粹形相）であろう。実在の根柢にある非合理的なものは具体的一般者であり、主語となって述語とならないものではなかったのか。ここでは西田は「見る眼」を「述語的なるもの」としている。これはどういうことなのだろうか。